

えんそくのしおりに

枠組みの中にまた枠組みがある。

どちらにも名前がついている。お互いがお互いの形式を持つ。
いろんなものが、ばらばらに並立し、行き来している。
それを一つのフレームからまなざすと、一枚の絵のようになる。

「次元のえんそく」とは、絵の比喩である。
絵は「描く」行為を通じて、いろんなものの間を行き来する。

絵は、物質とイメージの間を行き来する。絵の具は、奥行きのある物体になりすまし、イメージは平板な板に定着される。

絵を「描く」ことは、いろんな形容の間を行き来する。
塗ること、線を引くこと、貼り付けること、擦り付けること、や
すること、縫い付けること、彫り込むこと、こねること、刷ること、
配置することなどなど。
このすべてをひっくるめて、一枚の絵を「描く」行為となる。

絵を「描く」ことは、時には写真や、彫刻や、工芸と、立場を交
換する。そして絵は家具や、壁になることもある。
絵は、概念的にも、視覚的にも、いろんなものの間を行き来する。

私にとって、絵は、たった一つの次元を行き来するものではない。
その一つの間を行き来を最大化することだけが、良い絵画の形式に
なるわけではきっとない。

絵画は、物質とイメージを行き来することを通じて、図と地を、
芸術作品と単なるものを、再現と表現を、嘘と現実を、文化と自然
を、聖俗の貴賤を、技術の巧緻を、異なる立場を、愛と恋を、情
動を、死んでいるものと生きているもの間を、それらの秩序
をそれぞれに再構築しながら移行し合う、その関係性を、単一の
フレームによってまなざすための形式である。

本展では、日本絵画を起点として、額縁と画中画をモチーフにした
作品群を中心に発表する。多分フレームづけることよりも、
「描く」ことの方が先にくるだろうという留保つきで、視覚
と概念と両方の枠組みに関わる展示になると思う。

大仰な口上を述べたけれども、絵の方は、軽い気持ちで見れる
ものになっていたらと願っている。

「次元のえんそく」がどんな「えんそく」になっているか、ぜひ
実際の会場へ遊びにきて欲しい。

(文：岡本秀)

次元のえんそく(メタ・ピクニック)

作品を出すひと

岡本 秀(おかもと・しゅう)
1995年奈良県生まれ。京都市立
芸術大学大学院修士課程美術研
究科絵画専攻日本画在籍。主な
グループ展に2019年「たとえば
ここに飾るとして」(米原市醒井
宿資料館/滋賀)、「暗黙知の技
術」(Fab cafe, MTRL Kyoto/京
都)。受賞歴に2018年「シェル
美術賞 2018」入選、「はるひ絵
画トリエンナーレ」優秀賞、「京
都市立芸術大学作品展 2017」
市長賞。マンガ冊子「おぼけの連
判状」の発刊にも参加している。



《長安のお墓の絵の絵》
紙本着彩、ウッドシート
1690×1085×35(mm)/2018

日時と場所

2019年11月9日(土) - 11月24日(日)
11:00 - 19:00 (月曜休館)

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

〒604-0052 京都市中京区押油小路町 238-1

Phone: 075-253-1509 / E-mail: gallery@kcuu.ac.jp

http://gallery.kcuu.ac.jp

行きかた

京都市バス・京都バス「堀川御池」下車すぐ
京都市営地下鉄東西線「二条城前」駅下車2番出口より徒歩3分





《こんばんは》
紙本着色
2017(部分)



狩野永納筆「太公望の間」3Dモデルデータ
撮影協力：聖護院



《垂直プリントD-1》
紙本着色、アクリル絵の具、パイン集成材
2019

右：
《絵の絵》
紙本着色
2019(部分)

